平成２８年度

未来を創る女性懇話会

開催報告書

～環境生活部道民生活課女性支援室～

目　次

平成２８年度 未来を創る女性懇話会について

１．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２．懇話会の進行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

３．参加者からの意見（１）
　～視点１及び視点２に着目した「北海道の強み」について～・・・２

４．参加者からの意見（２）
　～「北海道の強み」を活かした取組等について～・・・・・・・・・７

５．道の施策等への反映について・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

別紙　平成２８年度 未来を創る女性懇話会ご意見等への対応一覧表

別添　「平成２８年度 未来を創る女性懇話会」議事録

平成２８年度　未来を創る女性懇話会について

１．はじめに

未来を創る女性懇話会（以下、「懇話会」という。）は、家庭や地域、職場など社会のあらゆる分野で重要な役割を担っている女性の経験や視点を今後の道政の各分野の施策に反映していくことを目的に設置したものであります。懇話会の構成は、知事、及びテーマに沿い懇話会ごとに選定した道内各地域で活躍なさっている女性の方々をメンバーとしております。

平成２８年度は、**「子どもを生み、育て、住み続けたい、と思える北海道づくり」**を懇話会テーマとして設定、１２月１６日に知事会議室において懇話会を開催いたしました。

本書においては、懇話会参加者の皆様からのご発言やご意見、及びご意見を踏まえての道の施策への反映などについて取りまとめました。

懇話会テーマ：子どもを生み、育て、住み続けたい、と思える北海道づくり

懇談の視点１

「子どもを生み育てたいとの希望をかなえる地域づくり」を進めていくうえで、**北海道の強み**　とは何か

懇談の視点２

「住み続けたいと思える地域づくり」を進めていくうえで、**北海道の強み**とは何か

懇談の視点３

懇談の視点１及び２を踏まえ、北海道の潜在力、優位性や特徴などの強みを最大限活かすために、どのような　**対策や取組などが必要**　か

２．懇話会の進行

懇話会テーマである「子どもを生み、育て、住み続けたい、と思える北海道づくり」のためには、社会情勢や現状を好機ととらえ、北海道の潜在力、優位性や特徴などの強みを活かすことが重要と考えます。

そうした考えから懇話会は、まず最初に、「北海道の強みとは何か」という視点から意見交換を行い、次に、その強みを最大限に活かす対策や取組などについて、ご意見などをうかがう形で、懇談を進行いたしました。

３．参加者からの意見（１）

～視点１及び視点２に着目した「北海道の強み」について～

意見１．

自然豊かな北海道、安全・安心に子育てできる北海道、これが強みだろう。

（北海道のよさは）めりはりのある四季、暑すぎない夏、梅雨がないこと。

（意見要旨抜粋）

・　３．１１のときに、放射能の問題があって、中標津町にも何家族かが移住されました。そのときの皆さんのご意見の中にもありましたが、やはり、自然豊かな北海道、安心・安全に子育てできる北海道に移住を希望される方がいたということで、これがまさに強みなのだろうなと思いました。

・　めりはりのある四季があり、夏も暑過ぎず、半年間は本当にいい気候です。梅雨も、最近は多少はありますが、そんなにひどくはなく、そんな環境で外でサッカーのトレーニングをできるというのは北海道のいいところではないかなと感じます。

意見２．

より安全で安心な食材が（北海道の）一番の強みなのかなと感じる。

（意見要旨抜粋）

・　子育てしているときのお母さんたちは、水一つにしても、子どもたちにどんなものを与えようかと、今

は非常にデリケートに選んでいらっしゃる時代です。そういう意味では、北海道の強みはそういうところにあるのではないかと思います。

・　食べたもので体ができる、食べたものがそのまま人間になるということを知って、本当に食べたもので変わっていくということを子どもたちに伝えなければいけない状況だと感じています。ですから、コンサドーレのほうでも、必ず、サッカー運動、そして食事、休養、この３本柱をしっかりと子どもたちに伝えております。

・　より安全で安心な食材が一番の強みなのかなと感じます。

意見３.

北海道には、もともと助け合いや支え合いの歴史、住民同士のつながりなどがある。
北海道は人の規模の小さい集まりが多いのでみんなが協力する形を実現しやすい。

（意見要旨抜粋）

・　北海道というのは、開拓時代の中で、もともと助け合いや支え合いなしにはまちはできなかったという歴史があると思う。

・　夏のお祭りのとき、全校生徒によって１日５時間かけておみこしが町内をぐるっと回るのに感動しまた。また、年越しのお祭りや季節ごとの雪のお祭り、夏のサマーフェスティバルなど、まちのお祭りスタッフということで、多分、２０代から５０代ぐらいの男性が中心になって、女性も一緒にいろいろなお祭りを盛り上げていたり、文化会館にはお年寄りも来てお酒を飲みながらカラオケをやったり、そういうお祭りがとても充実している。

・　お母さんたちやお父さんたちの活動があって、誰もが一緒になって手伝おうとか、声がかかっていなくてもほかの子どもの面倒を見ようとか、そういう感じがすごくいいなと思いました。

・　北海道の人は本当に温かいし、すごく協力的です。東北の震災のときに、南部藩だ、伊達藩だというのがあって、あなたはどこの人だなんていうのは、何だろうな、北海道の私には考えられませんという感じでした。うちの実家の父は奈良だったり、こちらは新潟から来たとか、みんなでそうやって寄せ集まって暮らしているから、そういうことに対する意識がないです。そういう中では、誰かが助けてと言うと、じゃ、頑張ろう、できる人がやろうよという土壌がある。

・　外から厚真町に入ってきて、このまちはおもしろいなと思えるところは、そもそも行政の教育委員会の主宰事業を委託で民間に出すようにしてやり始めたことでした。放課後子ども教室という事業は週４日間ありますが、職員が行政のトップの方々にちゃんと説明して実現していく、そういうことをやろうと言ってやり切れるだけの人がいたということなのです。私はイケてる公務員と呼んでいますが、そういう人がいるということは民間にとっても市民活動をしている人たちにとってもすごく心強い行政の職員がトップにちゃんと説明して実現していく、そういうことをやろうと言ってやり切れるだけの人がいる。

・　何か私が手伝えることがあったら一緒にやりたいなと思える人たちがたくさんいるまちだなと思ったの

です。

・　子育てという部分でも、支えてくれる人が民間にも行政にもいるとか、行政にしても、福祉課の人、教育委員会の人、まちづくりの人などが一緒になって、子育ての公営住宅を整備しましょうと言ったり、こども園など新しい施設をつくるときに課の垣根を越えてプロジェクトチームを組めるとか、柔軟に対応している姿がきっとこのまちの魅力の一つなのだろう。

・　私の住んでいる寿都町も人口３，０００人ぐらいのまちなので、結構、顔見知りだったり、みんなが何かの形でつながっていますが、今の上道さんのお話を聞いて、やはり、何かをしようというときには、つながりやすさというのはすごく大事だなと思いました。

　自分の仕事という枠を超えて、やりたい理想に向かってみんながいろいろな形で協力していける形をつくっていくことはいいことだなと思います。また、北海道は人口規模の小さい集まりが多いので、その分、そういったことを実現していきやすいのかなとも思いました。自分の仕事という枠を超えて、やりたい理想に向かってみんながいろいろな形で協力していける形をつくっていくことはいいことだなと思います。

意見４.

（北海道の中でも札幌市には）

広くてきれいで大きな公園や、天候に関係なく遊べる屋内施設がある。

子育てに関し公的支援が難しい部分で、ＮＰＯなどの民間団体が担っている。

（意見要旨抜粋）

・　札幌市は、転勤族の方も多いのですが、子育てしていく上で札幌市はなかなか住みやすいよという声もあったりします。

・　皆さん、こちらに引っ越されてきて喜ぶのは、すごく広くて、きれいで大きな公園がたくさんあるし、雪でも雨の日でも遊べる屋内の施設も整っていて、そういうところで子どもたちを伸び伸び遊ばせることができると話されています。札幌市は、転勤族の方も多いのですが、子育てしていく上で札幌市はなかなか住みやすいよという声もあったりします。

・　札幌市は、子育て支援のＮＰＯ団体や市民活動団体が結構たくさんあって活発に活動していますので、公的な支援ではなかなかできないようなはざまみたいなところを民間のＮＰＯ団体が担っていたりして、そういうところもすごくいいと思います。

意見５.

（地方のまちにおいて）大規模な学校には無い小規模の学校の良さがある。

（意見要旨抜粋）

・　自分が子育てをしたいと思う中で、やはり、大きい学校のほうがもっと難しいことができるのではないかとか、刺激も多いのではないかと思うのですが、小さい学校を見ていると、子どもたちへの目が行き届いているし、子どもも勉強に集中しているなと思う。

意見６.

北海道の人は温かいし協力的。誰かが助けてと言うと、じゃあ、頑張ろう、できる人がやろうよ、と（みんなが協力し助けようとする）土壌がある。

（その土壌を活かし）　助けてと言える場所、相談窓口などが必要。

（意見要旨抜粋）

・　北海道の人は本当に温かいし、すごく協力的です。東北の震災のときに、南部藩だ、伊達藩だというのがあって、あなたはどこの人だなんていうのは、何だろうな、北海道の私には考えられませんという感じでした。うちの実家の父は奈良だったり、こちらは新潟から来たとか、みんなでそうやって寄せ集まって暮らしているから、そういうことに対する意識がないです。そういう中では、誰かが助けてと言うと、じゃ、頑張ろう、できる人がやろうよという土壌があると思います。

・　そういうときに、どこで助けてと言えるのか、言う場所があるか、そこが非常に問題なのだと思います。若夫婦もそうですが、みんなが頑張り屋なので、自分は頑張らなきゃいけない、ここまで来たのだからやらなくちゃいけないんだみたいなところがやっぱりあるのですね。

　それはそれで重要だったとしても、やはり、必要な人たちに手助けをかりる場というか、そういう相談窓口は子育てなどでも必要なのかな。

意見７.

道東では木育がさかんで、退職後の方が子ども達のために、木でおもちゃをつくってくれたりしている。（そうした中）デザインは若手、作成は高齢者などと役割分担がされている。

若い人のセンスとシニアの方のものづくりのスキルなどのマッチングが大事。

（意見要旨抜粋）

・　道東では木育が今は結構進んでおります。

・　校長を退職した方が、うちに来るお子さんたちのために木のおもちゃをつくってくださっています。

・　デザインというのはやはり今の方たちが好むものがあるのですが、つくる方たちは年齢が高いから昔ながらのものになってしまうのですよ。そこで、ムクという団体をつくりまして、つくるのは年齢の高い方々、デザインをするのは若い方々ということで、そこがうまく合体すると結構おもしろいおもちゃがいろいろできました。

・　それが波及しまして、計根別という地域で羊を飼っている地域があるのですが、そこのおばあちゃんたちが自分たちで羊の毛を刈って毛糸にしているので、今度は、その毛糸を使って、お母さんたちがデザインして、編むのはおばあちゃんたちということで、る・る・るブランドと呼んで自分たちで楽しんでいます。

・　子育てというのは若いお母さんたちのセンスとかその時代の感覚というのがすごくあると思うので、そうしたものをどうマッチさせるかがすごく大事だなというふうに思っている。

4. 参加者からの意見（2）

～「北海道の強み」を活かした取組等について～

意見８.

北海道の優位性ということで、家庭医・何でも診る総合医、北海道にはこうした医師を育てる組織が複数ある。行政と組織と地域が連携して、地域で活躍する家庭医、総合医を育てていただきたい。

（意見要旨抜粋）

・　北海道の優位性というところで、私もやっている家庭医、何でも診る総合医ですが、北海道にはこうした医者を育てる組織が複数あります。ですから、行政と組織と地域が連携して、地域で活躍する家庭医、総合医を育てていきたいと思います。

・　やはり、子どもを産むには産科が必須ですが、私たち家庭医も、健診とか、トラブルのない出産であれば扱えると言われておりますので、行政、家庭医、専門医の連携によってそういったトレーニングの体制を整えていくことができればいいなと思っております。北海道の優位性というところで、私もやっている家庭医、何でも診る総合医ですが、北海道にはこうした医者を育てる組織が複数あります。

意見９.

北海道の優位性は知事が女性であること。子育てと仕事の両立への理解が高い。
付け焼き刃的では無く「子育てを大きな柱とする政策」を立てていただきたい。
小さいうちからきちんとした生活習慣を身につけていくこと、生きていく力を身につけた子どもを育てていくことが大切。自然と子どもを産んでも働き続けたいと思うようになる。男女を問わず、楽しく生き生きと働けること、それがそれぞれの職域の活性化につながる。

（意見要旨抜粋）

・　北海道の優位性ということでは、知事が女性ですので、子育てと仕事を両立することに非常に理解があるのではないかと思っております。子育てをされたことがある方は感じられているのではないかと思いますが、私は、子育ては全ての原点ではないかと感じております。ですから、つけ焼き刃的ではなく、子育てを大きな柱として政策を立てていっていただきたいと考えております。

・　それから、私が外来で診ている経験から、今は生活習慣病の方がたくさんいらっしゃいますが、大人になってから自分の習慣や考えを変えていくのは非常に大変なことです。三つ子の魂百までと言いますけれ

ども、やはり、小さいうちからきちんとした生活習慣を身につけていくことが大切です。また、ＷＨＯでライフスキルということが提唱されておりますように、生きていく力を身につけた子どもを育てていくことが非常に大事。ライフスキルを身につけた子というのは、自分で考え、自分で人生を選択していく、そして、自分のやりたい職業につくことができますし、自然と子どもを産んでも働き続けたいと思うようになります。男女を問わず、楽しく生き生きと働けること、それがそれぞれの職域の活性化につながりますし、長い目で見ていくと、それが北海道の活性化につながっていくと思う。また、医療面においては、ライフスキルが身についていると自己管理ができていきます。そして、病気になりにくいですから、医療費の削減にもつながり、健康な老人がふえることでさらに社会の活性化にもつながっていくと思われます。

意見１０.
（“子育て”を政策の柱とした取組として）
子どものために、地域の人々の力を引き出していけば、つながるということもできる。

（意見要旨抜粋）

・　具体的な取り組みとしては、大したアイデアもありませんが、子どものために地域の人々の力を引き出していけば、つながるということもできるようになっていくと思います。子どもというのは非常に未熟な立場なので、人の助けを必要としますから、そういうところで必然的に複数の大人が集まって支えていくという構造になっていくので、皆様が活動されているように、そうしたことが地域の活性化に役立っていくと思います。

意見１１.
（“子育て”を政策の柱とした取組として）
メディアを使って子育ての重要性をＰＲしていただきたい。

（意見要旨抜粋）

・　メディアを使って子育ての重要性をＰＲしていただきたいと思っております。というのも、今まで子育ては母親が担うものだという社会の通念のようなものがありました。しかし、実はものすごく大事な仕事であって、それを母親だけに任せておくのもどうかなと思います。やはり、母親、父親、祖父母、地域住民も本当に大事なのだという意識とか知識を共有していけたらいいなと思っております。

意見１２.

（“子育て”を政策の柱とした取組として）

病児保育、短期預かり保育などの制度の整備が必要。

（意見要旨抜粋）

・　親をサポートすることによって親のゆとりをつくることが必要です。子育てというのは、必死にやっているのはわかりますが、やはり、ゆとりを持って子育てしたほうが子どももよく育つと思います。そういった点では、例えば、病児保育とか、夜の会議に出席するようなときの短時間預かりなど、そうした制度を整えていただきたいと思います。さらに、子どもの学びをサポートしていくことも大事かなと思います。私は、この会議に出席するに当たって、周りの働いているお母さんたちにいろいろお話を伺ったのですが、全員が病児保育は本当に必要だと話しておりました。

意見１３.

北海道の人は温かいし協力的。誰かが助けてと言うと、じゃあ、頑張ろう、できる人がやろうよ、と（みんなが協力し助けようとする）土壌がある。

（その土壌を活かし）必要な人たちに手助けをかりる場というか、

そういう相談窓口は子育てなどでも必要。

（意見要旨抜粋）

・　北海道の人は本当に温かいし、すごく協力的です。東北の震災のときに、南部藩だ、伊達藩だというのがあって、あなたはどこの人だなんていうのは、何だろうな、北海道の私には考えられませんという感じでした。うちの実家の父は奈良だったり、こちらは新潟から来たとか、みんなでそうやって寄せ集まって暮らしているから、そういうことに対する意識がないです。そういう中では、誰かが助けてと言うと、じゃ、頑張ろう、できる人がやろうよという土壌があると思います。

・　そういうときに、どこで助けてと言えるのか、言う場所があるか、そこが非常に問題なのだと思います。若夫婦もそうですが、みんなが頑張り屋なので、自分は頑張らなきゃいけない、ここまで来たのだからやらなくちゃいけないんだみたいなところがやっぱりあるのですね。

それはそれで重要だったとしても、やはり、必要な人たちに手助けをかりる場というか、そういう相談窓口は子育てなどでも必要なのかな。

意見１４.

デザインというのはやはり今の方たちが好むものがある。つくる方たちは年齢が高いから昔ながらのものになってしまう。そこで、ムクという団体をつくりまして、つくるのは年齢の高い方々、デザインをするのは若い方々ということで、そこがうまく合体すると結構おもしろいおもちゃがいろいろできました。それが波及し、計根別という地域で羊を飼っている地域があるのですが、そこのおばあちゃんたちが自分たちで羊の毛を刈って毛糸にしているので、今度は、その毛糸を使って、お母さんたちがデザインして、編むのはおばあちゃんたちということで、る・る・るブランドと呼んで自分たちで楽しんでいる。

（意見要旨抜粋）

・　デザインというのはやはり今の方たちが好むものがあるのですが、つくる方たちは年齢が高いから昔ながらのものになってしまうのですよ。そこで、ムクという団体をつくりまして、つくるのは年齢の高い方々、デザインをするのは若い方々ということで、そこがうまく合体すると結構おもしろいおもちゃがいろいろできました。

・　それが波及しまして、計根別という地域で羊を飼っている地域があるのですが、そこのおばあちゃんたちが自分たちで羊の毛を刈って毛糸にしているので、今度は、その毛糸を使って、お母さんたちがデザインして、編むのはおばあちゃんたちということで、る・る・るブランドと呼んで自分たちで楽しんでいます。子育てというのは若いお母さんたちのセンスとかその時代の感覚というのがすごくあると思うので、そうしたものをどうマッチさせるかがすごく大事だなというふうに思っている。

意見１５.

多世代がつながる拠点づくりと、つながりをコーディネートする人材が必要。

（意見要旨抜粋）

・　つながる拠点が必要だなと思っていますが、ただつくればいいのではなく、そこにコーディネートする人材も必要で、その土地、地域の人を知っている人がやはりキーポイントになる。

・　行政の方でもいいですし、民間の方を活用してもいいと思うのですが、いろいろな種類のつながる拠点みたいなところがあったらいいなと思います。

・　拠点というのも、今までは子ども、障がい、お年寄りと別々に分けて拠点がつくられていたと思うのです。しかし、今は、多世代というのはすごく効果があります。

・　元シェフをやっていた６０代の方ですが、奥さんが亡くなられてから荒れてしまって、家族が誰もいなくて、酒浸りになって、いつ死んでもいい暮らしをしていたけれども、ある日、奥さんが枕元にじっと立っている夢を見たそうです。そこで、何かしなければと思って、社協のボランティアの情報を見て、うちに来たのです。うちでは、課題をちょっと抱えた子どもたちの学習支援や食事提供しているのですが、その方がおやつやご飯をつくってくださることになりました。そうしたら、元シェフだから本当においしいのです。それで、みんなも喜んでその人になつくし、本当にお酒を飲むのも控えるようになって、ここが生きがいだここを見つけられてよかったというふうに言ってくれるのです。
・　そんな中で、何と、その方は、前に働いていたところからまた声がかかって、６５歳を過ぎてラーメン屋で働き始めたのですよ。それでも、仕事もするけれども、俺の生きがいだから、子どもたちが待っているから、ここのボランティアはやめないと言って、働きながらボランティアを続けてくださっています。
・　多世代が集まるところというのは地域のリソースセンターだと思うのですよね。子どもに限らず、大人に限らず、その地域に潜在的に眠っている人たちが拠点に集まって、みんなが循環型で元気になっていくような、そんなつながる拠点がやはり必要だなというふうに思っています。

意見１６.
涼しい気候と広大な土地を活かし、スポーツや吹奏楽などの合宿を受け入れる。

（意見要旨抜粋）
・　北海道を生かすということでは、涼しい気候と広大な土地を生かしてスポーツや吹奏楽などの合宿の受け入れがいいのではないかと思いました。
・　枝幸町では、先日、スポーツボランティア、おもてなし、異文化理解を学ぶ講座が開かれました。
・　枝幸町は、現時点では合宿を受け入れたことがないので、やはり、受け入れるに当たってはまちの人の共通理解が必要だと思います。泊まるところも必要だし、食事も必要だし、まちの雰囲気も必要なので、これからはほかの地域から来る人を受け入れる理解を深めなければいけないと感じたところです。

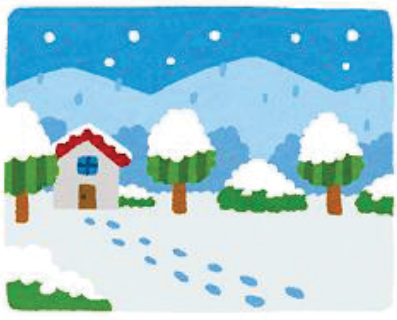
意見１７.

北海道は、住み続けたい・育てたいということでは最適な場所。
北海道の良さは日本では浸透してきているので、さらに世界に目を向けて、若い世代へサッカーを通して北海道の良さを伝えることができたらいい。

（意見要旨抜粋）

・　北海道は、住み続けたいとか育てたいということに本当に最適だなと感じます。コンサドーレの選手というのは、本当に入れかえが激しいのです。ことしは２０周年目を迎えまして、たくさんの選手が移籍とか引退されたのですが、北海道出身ではない方が引退してからもコーチなどで北海道で活動しているのは、みんな北海道が好きなんだなというふうに私自身もすごく感じています。私も三重県で２年活動していましたが、北海道っていいよねと言われることが本当に多いのですね。

・　そんなふうに日本の中では浸透してきていますので、さらに、世界に目を向けて、今度は、もっと若い世代、中学生とか小学生、本当に小さいお子様にもサッカーを通して北海道のよさを伝えることができたらいいなと思います。北海道では、長靴で雪を踏み固めて雪中サッカーをやっています。雪の上ですから転んでも痛くないですし、寒さを忘れるぐらい結構いい汗もかいて楽しいことができます。そういったことや、北海道の食材なども伝えながら、全世界に北海道のよさを伝えていきていけたらいいなと思っております。



5. 道の施策等への反映について

懇話会参加者の皆様からのご意見等は、ご意見の内容を踏まえ、道庁内所管部・関係部等において施策への反映などについて検討、その結果を次のとおり取りまとめました。

意見８.

北海道の優位性ということで、家庭医・何でも診る総合医、北海道にはこうした医師を育てる組織が複数ある。行政と組織と地域が連携して、地域で活躍する家庭医、総合医を育てていただきたい。

○　広大な地域に医師が偏在する本道において、効率的な医療サービスを提供する上で、幅広い診療に対応できる総合診療医は重要な役割を担うことから、これまで、総合診療医の育成や指導医の養成を行う道内 15 の医療機関に対する支援を行ってきました。

平成 29 年度は、こうした取組に加え、道内医育大学の医学生等に対する総合診療医の理解促進に努めるなど、引き続き総合診療医の養成を推進していきます。

意見９.

（１）北海道の優位性は知事が女性であること。子育てと仕事の両立への理解が高い。
付け焼き刃的では無く「子育てを大きな柱とする政策」を立てていただきたい。
小さいうちからきちんとした生活習慣を身につけていくこと、生きていく力を身につけた子どもを育てていくことが大切。自然と子どもを産んでも働き続けたいと思うようになる。

（２）男女を問わず、楽しく生き生きと働けること、それがそれぞれの職域の活性化につながる。

（１）について

○　子育てを柱とする政策としては、「北海道総合計画」において、北海道の「７つの将来像」のひとつとして、地域全体で支える「子育て環境・最適地」を掲げ、安心して子どもを生み育てることができる環境づくりの推進に取り組んでいます。

○　義務教育に関しては、これまで、地域住民が学校の教育活動を支援する「学校支援地域本部事業」や、地域住民が協力し補充的な学習支援を行う「子ども未来塾」の取組のほか、保護者や地域住民が学校運営に参画する、コミュニティ・スクールの導入を進めています。こうした取組により、子どもたちの学びや教育環境の充実が図られることはもとより、地域の教育力を支える新たな人のつながりも生まれています。

○　生涯学習に関しては、平成 27 年度から「地域人材による家庭教育支援推進事業～家庭教育学びカフェ推進事業」において養成したコーディネーターを中心に、各地域において、子育てや家庭教育にかかわる学習・相談機会を設け、保護者相互の学びを促進するとともに、家庭教育支援にかかわる保護者間のネットワークづくりに取り組んでいます。

（2）について

○　ワーク・ライフ・バランスの促進について、平成 28 年 3 月に策定した「北海道女性活躍推進計画」の柱の一つとして、「男女がともに働きやすい環境づくりの推進」を掲げ、ワーク・ライフ・バランスをテーマとする講演会の開催などの全道的な取組を進めてきたところです。

　いただいたご意見の趣旨等を検討し、男女がともに働きやすい環境づくりの取組を道内各地に広げていくことが必要との観点から、ワーク･ライフ・バランスをテーマとするセミナーを平成 29 年度は、札幌以外を開催場所とすることとし、新たに調整を進めています。

○　また、これまで育児や介護と仕事の両立できる制度など男女が共に働きやすい職場環境づくりに積極的に取り組んでいる企業を登録し、当該企業が社会的に評価される仕組みである「北海道あったかファミリー応援企業登録制度」の創設や両立支援パンフレットによる普及啓発を実施してきました。

　平成 28 年 4 月からは、女性活躍に積極的に取組む企業を認定し優遇措置を付与する「北海道なでしこ応援企業認定制度」の創設や「北海道なでしこ応援企業表彰」を実施するなどして、女性の活躍を支援しています。

　さらに、復職を希望する子育て中の母親等に対する支援として、ジョブカフェ北海道にマザーズ・キャリアカフェを設置し、マザーズ・コンシェルジュを配置して、きめ細かなカウンセリングを実施しています。

意見１０.
（“子育て”を政策の柱とした取組として）
子どものために、地域の人々の力を引き出していけば、つながるということもできる。

○　子育てを社会全体で支える環境づくりのため、地域の「せわずき・せわやき隊」、「どさんこ・子育て特典制度」協賛店舗、「赤ちゃんのほっとステーション」などの登録を促進しています。

○　義務教育に関しては、これまで、地域住民が学校の教育活動を支援する「学校支援地域本部事業」や、地域住民が協力し補充的な学習支援を行う「子ども未来塾」の取組のほか、保護者や地域住民が学校運営に参画する、コミュニティ・スクールの導入を進めてきており、こうした取組により、子どもたちの学びや教育環境の充実が図られることはもとより、地域の教育力を支える新たな人のつながりも生まれています。

○　生涯学習に関しては、平成 27 年 2 月に第 3 次北海道生涯学習推進基本構想を策定して、子どもたちの学びを支える人材の育成や地域との豊かなつながりの中での家庭教育の推進の必要性を示し、市町村を支援するとともに民間企業や団体等との連携・協力の下、学習機会を拡充し、成果を活用する仕組みづくりを進めています。

意見１１.
（“子育て”を政策の柱とした取組として）
メディアを使って子育ての重要性をＰＲしていただきたい。

○　平成 28 年度の広報重点テーマに「暮らし」を掲げ、道政広報テレビ番組において「地域みんなで子育て」と題した特集を放送したほか、広報紙「ほっかいどう」や民間企業との協働（フリーペーパーへの記事掲載、コンビニエンスストアのレシート・店内放送の活用、ポスター掲示等）による啓発を実施するなど、様々なメディアを活用し、結婚や出産、子育ての希望を叶えることのできる環境づくりのための広報に努めています。
　今後も、多様な手法を用いて子育ての重要性をＰＲしていきます。

○　また、平成 27～28 年度の 2 年間、少子化対策ポジティブキャンペーンとして、テレビＣＭ等を展開しています。

　さらに、男性の家事・育児参加に係る講座の開催や、孫育てガイドブックの配布など、母親以外の方が育児を担うための支援を実施しています。

意見１２.

（“子育て”を政策の柱とした取組として）

病児保育、短期預かり保育などの制度の整備が必要。

○　平成 28 度から、国庫補助の対象とならない 49 人以下のファミリー・サポート・センターにおける病児等の預かりを促進する事業を実施し、市町村における病児保育事業を促進しています。

　また、地域における育児・介護に関する相互援助活動を行うファミリー・サポート・センターの設置促進を図るため、既存ファミリー・サポート・センターの職員と、設置を検討している市町村の関係職員による意見交換会や、ホームページによる事業紹介を実施しています。

意見１３.

北海道の人は温かいし協力的。誰かが助けてと言うと、じゃあ、頑張ろう、できる人がやろうよ、と（みんなが協力し助けようとする）土壌がある。

（その土壌を活かし）必要な人たちに手助けをかりる場というか、そういう相談窓口は子育てなどでも必要。

○　保護者の交流や、子育てに関する相談対応等を行う地域子育て支援拠点の整備、子育てをサポートする「せわずき・せわやき隊」の登録、「ファミリー・サポート・センター」の設置等を推進しています。

意見１５.

多世代がつながる拠点づくりと、つながりをコーディネートする人材が必要。

○　平成 28 年度から、共生型地域福祉拠点推進事業（30 年度まで）として、セミナー開催やサポートガイドの作成、人材養成のための研修等による新たな取組の立ち上げ促進を実施しています。また、地域づくり総合交付金のメニューとして、平成 28 年度から共生型地域福祉拠点整備・促進事業を実施しており、施設・設備整備と人材養成に係る経費への助成により市町村の取組を支援しています。

意見１６.

涼しい気候と広大な土地を活かし、スポーツや吹奏楽などの合宿を受け入れる。

○　オリンピック・パラリンピックなどの国際大会における海外選手団の合宿を道内に誘致するため、関係者への働きかけや道内市町村の合宿情報の発信などに取り組んでいます。

　また、スポーツを通じて新たな観光・交流人口の拡大や地域経済の活性化を図るため、関係団体や民間企業と連携し、スポーツに関するシティーセールスやマーケティング活動をワンストップで展開する「スポーツコミッション」の設立を進めています。

意見１７.

北海道は、住み続けたい・育てたいということでは最適な場所。

北海道の良さは日本では浸透してきているので、さらに世界に目を向けて、若い世代へサッカーを通して北海道の良さを伝えることができたらいい。

○　道内におけるスポーツ振興、青少年の健全育成及び地域の活性化促進等のため、平成８年度に(株)北海道フットボールクラブ（現(株)コンサドーレ）に出資するとともに、運営資金の貸付や広告への協力など、様々な支援を行っております。

　また、平成 28 年 7 月にロシア・サハ共和国において開催された国際スポーツ大会「アジアの子どもたち」に、コンサドーレ札幌のユースチームを派遣するなどスポーツによる国際交流に取組んでおります。

別　紙

平成28年度 未来を創る女性懇話会ご意見等への対応一覧表

「子どもを生み、育て、住み続けたい、と思える北海道づくり」をテーマとし、その実現に向け**「北海道の強みを活かしどんな取組が必要か」**等の視点からいただいたご意見等について、道（所管部等）の考え方などを次のとおり取りまとめました。

No.	報告書記載番号	ご意見・ご提案	検討の基準（別表１）	「ご意見・ご提案」に対する考え方等
1	意見８	北海道の優位性ということで、家庭医・何でも診る総合医、北海道にはこうした医師を育てる組織が複数ある。行政と組織と地域が連携して、地域で活躍する家庭医、総合医を育てていただきたい。	B	・広大な地域に医師が偏在する本道において、効率的な医療サービスを提供する上で、幅広い診療に対応できる総合診療医は重要な役割を担うことから、道では、これまで、総合診療医の育成や指導医の養成を行う道内15の医療機関に対する支援を行ってきたところ。 ・平成29年度は、こうした取組に加え、道内医育大学の医学生等に対する総合診療医の理解促進に努めるなど、引き続き総合診療医の養成を推進してまいる。
2	意見９	北海道の優位性は知事が女性であること。子育てと仕事の両立への理解が高い。付け焼き刃的では無く「子育てを大きな柱とする政策」を立てていただきたい。 小さいうちからきちんとした生活習慣を身につけ、生きていく力を身につけた子どもを育てていくことが大切。自然と子どもを産んでも働き続けたいと思うようになる。男女を問わず、楽しく生き生きと働けることが職域の活性化につながる。	B	・道では、「北海道総合計画」において、北海道の「７つの将来像」のひとつとして、①地域全体で支える「子育て環境・最適地」を掲げ、安心して子どもを生み育てることができる環境づくりの推進に取り組むこととしているところ。 ・道教委では、これまで、地域住民が学校の教育活動を支援する「学校支援地域本部事業」や、地域住民が協力し補充的な学習支援を行う「子ども未来塾」の取組のほか、保護者や地域住民が学校運営に参画する、コミュニティ・スクールの導入を進めてきており、こうした取組により、子どもたちの学びや教育環境の充実が図られることはもとより、地域の教育力を支える新たな人のつながりも生まれてきている。 ・道教委では、平成27年度から「地域人材による家庭教育支援推進事業～家庭教育学びカフェ推進事業」において養成したコーディネーターを中心に、各地域において、子育てや家庭教育にかかわる学習・相談機会を設け、保護者相互の学びを促進するとともに、家庭教育支援にかかわる保護者間のネットワークづくりにも取り組んでいる。
			A	・ワーク・ライフ・バランスの促進について、道では、平成２８年３月に策定した「北海道女性活躍推進計画」の柱の一つとして、「男女がともに働きやすい環境づくりの推進」を掲げ、ワーク・ライフ・バランスをテーマとする講演会の開催などの全道的な取組を進めてきたところ。 ・いただいたご意見の趣旨等を検討し、男女がともに働きやすい環境づくりの取組を道内各地に広げていくことが必要との観点から、ワーク･ライフ・バランスをテーマとするセミナーを平成２９年度は、札幌以外を開催場所とすることとし、調整を進めている。 ・道ではこれまでも育児や介護と仕事の両立できる制度など男女が共に働きやすい職場環境づくりに積極的に取り組んでいる企業を登録し、当該企業が社会的に評価される仕組みである「北海道あったかファミリー応援企業登録制度」の創設や両立支援パンフレットによる普及啓発に加え、平成28年４月から、さらに女性活躍に積極的に取組む企業を認定し優遇措置を付与する「北海道なでしこ応援企業認定制度」の創設や「北海道なでしこ応援企業表彰」を実施するなどして、女性の活躍を支援。 また、復職を希望する子育て中の母親等に対する支援として、 ジョブカフェ北海道にマザーズ・キャリアカフェを設置し、マザーズ・コンシェルジュを配置して、きめ細かなカウンセリングを実施。
3	意見１０	（“子育て”を政策の柱とした取組として） 子どものために、地域の人々の力を引き出していけば、つながるということもできる。	B	・道では、子育てを社会全体で支える環境づくりのため、地域の「せわずき・せわやき隊」、「どさんこ・子育て特典制度」協賛店舗、「赤ちゃんのほっとステーション」などの登録を促進。 ・道教委では、これまで、地域住民が学校の教育活動を支援する「学校支援地域本部事業」や、地域住民が協力し補充的な学習支援を行う「子ども未来塾」の取組のほか、保護者や地域住民が学校運営に参画する、コミュニティ・スクールの導入を進めてきており、こうした取組により、子どもたちの学びや教育環境の充実が図られることはもとより、地域の教育力を支える新たな人のつながりも生まれてきている。 ・道教委では、平成27年2月に第3次北海道生涯学習推進基本構想を策定して、子どもたちの学びを支える人材の育成や地域との豊かなつながりの中での家庭教育の推進の必要性を示し、市町村を支援するとともに民間企業や団体等との連携・協力の下、学習機会を拡充し、成果を活用する仕組みづくりを進める。

No.	報告書記載番号	ご意見・ご提案	検討の基準（別表１）	「ご意見・ご提案」に対する考え方等
4	意見１１	（“子育て”を政策の柱とした取組として） メディアを使って子育ての重要性をＰＲしていただきたい。	B	・道では平成２８年度の広報重点テーマに「暮らし」を掲げ、道政広報テレビ番組において「地域みんなで子育て」と題した特集を放送したほか、広報紙「ほっかいどう」や民間企業との協働（フリーペーパーへの記事掲載、コンビニエンスストアのレシート・店内放送の活用、ポスター掲示等）による啓発を実施するなど、様々なメディアを活用し、結婚や出産、子育ての希望を叶えることのできる環境づくりのための広報に努めてきたところであり、今後も多様な手法を用いて子育ての重要性をPRしてまいる。 ・道では、平成２７～２８年度の２年間、少子化対策ポジティブキャンペーンとして、テレビＣＭ等を展開。 ・また、男性の家事・育児参加に係る講座の開催や、孫育てガイドブックの配布など、母親以外の方が育児を担うための支援を実施。
5	意見１２	（“子育て”を政策の柱とした取組として） 病児保育、短期預かり保育などの制度の整備	B	・道では、平成２８年度から国庫補助の対象とならない４９人以下のファミリー・サポート・センターにおける病児等の預かりを促進する事業を実施し、市町村における病児保育事業を促進。 ・また、地域における育児・介護に関する相互援助活動を行うファミリー・サポート・センターの設置促進を図るため、既存ファミリー・サポート・センターの職員と設置を検討している市町村の関係職員による意見交換会や、ホームページによる事業紹介を実施。
6	意見１３	北海道の人は温かいし協力的。誰かが助けてと言うと、じゃあ、頑張ろう、できる人がやろうよ、と（みんなが協力し助けようとする）土壌がある。（その土壌を活かし）子育ての相談窓口などが必要。	B	・道では、保護者の交流や子育てに関する相談対応等を行う地域子育て支援拠点の整備や、子育てをサポートする「せわずき・せわやき隊」の登録、「ファミリーサポートセンター」の設置等を推進。
7	意見１５	多世代がつながる拠点づくりと、つながりをコーディネートする人材が必要	B	・道では、平成28年度から共生型地域福祉拠点推進事業（30年度まで）として、セミナー開催やサポートガイドの作成、人材養成のための研修等による新たな取組の立ち上げ促進を実施。 ・また、地域づくり総合交付金のメニューとして、平成28年度から共生型地域福祉拠点整備・促進事業を実施しており、施設・設備整備と人材養成に係る経費への助成により市町村の取組を支援。
8	意見１６	涼しい気候と広大な土地を活かし、スポーツや吹奏楽などの合宿を受け入れる。	B	・オリンピック・パラリンピックなどの国際大会における海外選手団の合宿を道内に誘致するため、関係者への働きかけや道内市町村の合宿情報の発信などに取り組んでいる。 　また、スポーツを通じて新たな観光・交流人口の拡大や地域経済の活性化を図るため、関係団体や民間企業と連携し、スポーツに関するシティーセールスやマーケティング活動をワンストップで展開する「スポーツコミッション」の設立を進めている。
9	意見１７	北海道は、住み続けたい・育てたいということでは最適な場所。 北海道の良さは日本では浸透してきているので、さらに世界に目を向けて、若い世代へサッカーを通して北海道の良さを伝えることができたらいい。	B	・道内におけるスポーツ振興、青少年の健全育成及び地域の活性化促進等のため、平成８年度に(株)北海道フットボールクラブ（現(株)コンサドーレ）に出資するとともに、運営資金の貸付や広告への協力など、様々な支援を行ってきている。 　平成28年7月にロシア・サハ共和国において開催された国際スポーツ大会「アジアの子どもたち」に、コンサドーレ札幌のユースチームを派遣するなどスポーツによる国際交流に取り組んでいる。

（別表１）

区分	対　応
A	・意見を受けて、事業化を検討（新規・拡充）
B	・既存の施策で事業等実施済（実施中）
C	・現時点においては、社会情勢や周辺環境等の要因により喫緊の事業化とはならないが、今後の事業の進め方等の参考とする
D	・国等へ要望する
E	・その他（道の事務事業にはなじまないものを含む）

別　添

平成２８年度未来を創る女性懇話会

議　　事　　録

日時：平成２８年１２月１６日（金）　午前１０時３０分～
場所：北 海 道 庁 本 庁 舎　　３ 階　　知 事 会 議 室

１　開会

〇司会（小玉環境生活部長）

イランカラプテ。ただいまより、平成２８年度未来を創る女性懇話会を始めます。

私は、本日の司会進行を務めます北海道環境生活部長の小玉と申します。

きょうは、よろしくお願いいたします。

２　副知事挨拶

〇山谷副知事

改めまして、おはようございます。

きょうは、お忙しいところ、また、遠路はるばるお集まりをいただきまして、大変ありがとうございます。

この時間設定ですから、多分、きのうからお越しになっておられるのかなと思います。お仕事の都合等もいろいろある中、時間を割いていただいたことに、本当に感謝申し上げたいと思います。

本来であれば、知事が皆さんとお話しする場でありますが、ニュース等でご承知のように、プーチン大統領と安倍総理の日ロの会談がきのう、きょうと行われております。当初は、１５日、山口県の静かな環境の中で行いたいという話でありまして、私どもも、北方四島を返せと今まで何回もシュプレヒコールを繰り返しておりますが、あまり騒がせてはいけないかなと思って見ておりました。しかし、共同開発も含めた経済交流に話がシフトしてきまして、こうなると、北海道で中心になってそれを行っていただいている企業もいろいろあるので、ぜひとも高橋知事に出席してほしいという要請が参りまして、きょうは東京に行かなければならなくなりました。皆さんには大変申しわけない、よろしくお伝えしてください、ということでありました。

皆さんには、お時間を割いていただいている中、本当に申しわけないと思います。私で務まるかどうかはわかりませんけれども、ご一緒させていただいて、皆さんのお話をお伺いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

また、今、少子高齢化の中で女性の活躍ということが言われております。しかし、正直に申し上げて、道庁でも女性の管理職は６％くらいでしょうか、まだ十分に女性の方々の活躍の場を確保できていないと自分でも思うところであります。ただ、そうした先頭に立って頑張っているのが高橋知事でありまして、まさに地域で活躍している皆さんと高橋知事とで大いに語り合っていただいて、そして、この場の話をこれから頑張ってほしい人たちにエールとして発信したい、そういうことがこの懇話会の趣旨であります。

本日は、午後からは、女性を応援する経済団体の「北の輝く女性応援会議」というものも予定しておりますので、そうした会議でもこの場でのお話をお伝えして、経済産業団体のほうでもいろいろ考えていただきたい、そんなふうに思っているところでございます。

本日は、どうぞ、活発な意見交換をよろしくお願いしたいと思います。

３　自己紹介

〇上道さん

厚真町より参りましたオフィスあっぷ・ろーどの上道と申します。平成２４年４月から、厚真町の教育委員会が主催して放課後子ども教室という事業を展開することになりました。そのときに委託を受けたのがＮＰＯ法人ねおすというところでして、私はそちらのスタッフとして担当しておりました。ただ、この春から、私のほうでオフィスあっぷ・ろーどを立ち上げて、今は独立してそのまま業務を引き継ぐ形で活動しています。自分のふるさとのことを、自分の体験をもとに、自分の言葉で語れる子どもたちを育てようということを目指し、地域の資源を生かした体験プログラムの企画、運営を担当しております。

〇小林さん

札幌市豊平区月寒で地域子育て支援拠点事業を開設して今年で９年、来年で１０周年を迎えます。札幌市で言う常設子育てサロンですが、その代表をやっている小林と申します。ねっこぼっこのいえは、ちょっと変わった子育てサロンで、赤ちゃんからお年寄りまで、障がいのある人も、ない人も来られる多世代型の子育てサロンで、去年は年間で延べ６，０００人以上の方が集っていまして、８割は乳幼児親子ですが、あとの２割は多世代となっています。近年では、近隣中学校の不登校の子どもたちにとって学校と家庭以外の居場所になったりしています。学校に行けなくても、ねっこぼっこのいえに来てボランティアをしたり、また、今、子どもの貧困が言われていますが、月に１回、夜に無料の食事会を

したり、あるいは、学習支援などで集ったりしています。さらに、ここにはお年寄りの方も来ていただいており、おやつをつくったり、託児をしたり、見守りをしていただいたりして活躍しています。

〇小路さん

ＮＰＯ法人枝幸三笠山スポーツクラブの設立時の理事であり、現在は、トリニティースノーボードスクールのインストラクターをしておりまして、枝幸町の歌登に住んでいます。７年前に、３歳と１歳の子どもと一緒に札幌から歌登へ引っ越してきました。初めは、誰も知り合いがいなかったのですが、だんだんママ友ができるようになり、お手伝いをしたいということで枝幸三笠山スポーツクラブのクラブマネジャーを訪ねました。エムスク（枝幸三笠山スポーツクラブ）は、その後、ＮＰＯ法人の資格を取得して、体育館等のスポーツ施設の指定管理者になりました。現在は、エアロビクスやキッズダンスなど多様なプログラムを持ち、時間帯もふえて利用者も参加しやすくなっています。私は、スノーボードのＣ級インストラクターの資格を取得して、小学生など初心者を対象に時々指導しています。スノーボードナイターなど、子どもたちが友達同士で滑っている姿を見ると、とてもうれしく思います。

〇中川さん

後志の寿都町立診療所で医師をしている中川久理子と申します。寿都診療所に赴任して１２年目になりますが、その間、４人の子どもを出産し、育てつつ、今は午前中の外来のみという形で働かせていただいています。今日は、このような場にお招きいただき、大変光栄に思っております。

〇松實さん

今、話題の根室管内から参りました。中標津町のＮＰＯ法人子育てサポートネットる・る・るの代表をやらせていただいている松實とよ実と言います。中標津というのは２万４，０００人の小さなまちですが、私は、そこでお母さんたちだけで立ち上げた子育て支援の団体をやってまいりました。今、平成１１年からですから１７年目になりますが、法人化したのは５年前です。まず、自分たちが自由に使える活動拠点が欲しいということで、あいた商店街の場所を使い、自分たちで直して「る・る・る」という場所をつくりました。人がいる、人が集まる、場所があるという三つの「る」を重ねて「る・る・る」という名前にしました。中標津町は、割と転勤族が多いですし、酪農家のお嫁さんも関東とか関西から入っている方々が結構多くて、地縁、血縁のない女性が初めての育児、教育をする場であるということが大きかったので、まずは自分たちでそういう人たちが自由に集まれる場所をつくろうと考え、「る・る・る」を始めました。また、医療系がちょっと薄い地域

なので、安心して出産できるように、助産師と保健師と保育士の資格を持った「る・る・る」の仲間で母子保健事業も立ち上げていまして、日ごろはそんな形で活動しております。

〇宗像さん

私は、北海道コンサドーレ札幌の女子サッカーチーム、北海道リラ・コンサドーレで監督をしている宗像訓子と申します。女子のサッカー人口は、なでしこジャパンの活躍のおかげで本当にたくさん増えてきました。ただ、幼稚園、小学校ではたくさんのお子様がやっているのですが、中学生になると、中学校の女子サッカー部が余りないので、サッカーではなく、他のスポーツへ移ってしまうことが今まで大変多く見られました。そこで、女子サッカーの中学生年代の受け皿をぜひともコンサドーレにつくりたいと思い、去年立ち上げ、今年で２年目になります。今は中学生主体の女子サッカーチームですが、いずれ高校生、大人、そして、男子サッカーで言うＪ１に当たる「なでしこリーグ」を目指しつつ、また、なでしこジャパンで活躍する選手をぜひ北海道リラ・コンサドーレから輩出したいなと思いながら活動しております。

２　意見交換

懇話会テーマ：子どもを生み、育て、住み続けたい、と思える北海道づくり

〇司会（小玉環境生活部長）

それでは、テーマに基づいて意見交換を進めさせていただきます。

今回のテーマは、「子ども生み、育て、住み続けたい、と思える北海道づくり」でございます。

本日の意見交換の流れを簡単にご説明しますと、皆様には、今回のテーマに基づいた三つの柱を話題として事前にお知らせしております。その話題の一つは、子どもを産み育てたいとの希望をかなえるため、生かすべき北海道の強みとは何か、そして、話題の二つ目は、住み続けたいと思える北海道とするため、生かすべき北海道の強みとは何か、三つ目は、話題１と話題２を踏まえて、北海道の潜在力、優位性や特徴などの強みを最大限に生かすために何ができるのかということで、この三つの柱に沿って懇談を進めさせていただきたいと思います。

まず初めに、三つの話題について、それぞれお１人の方からご意見をいただき、その後、その話題ごとに皆様と意見交換をしてまいりたいと思います。話題の一つ目の子どもを産み育てたいとの希望をかなえるため、生かすべき北海道の強みとは何かにつきましては、

子育て支援のＮＰＯ法人を中標津町で運営されておられる松實様から、歴史を生かした地域での子育てについてご意見を伺いたいと思います。

松實様、よろしくお願いいたします。

○松實さん

３．１１のときに、放射能の問題があって、中標津町にも何家族かが移住されました。そのときの皆さんのご意見の中にもありましたが､やはり、自然豊かな北海道、安心・安全に子育てできる北海道に移住を希望される方がいたので、これがまさに強みなのだろうなと思いました。やはり、道産食材に対するアピール度というのは高いほうがいいのではないかと思います。子育てしているときのお母さんたちは、水一つにしても、子どもたちにどんなものを与えようかと、今は非常にデリケートに選んでいらっしゃる時代です。そういう意味では、北海道の強みはそういうところにあるのではないかと思います。

それと同時に、北海道の中では、今、学力の低下など、教育の問題がいろいろあります。そういう中で、私は、寒さをマイナスに捉えないで、それをプラスに考えて、寒さを生かした遊び場というものをもう少し構築できないのかなと考えております。ねおすの方もいらっしゃっていますが、私たちも考えているのは、中標津の自然とか、別海のあれだけの草原をうまく生かして子どもたちを育てていく、自然の中で、何もないところで子どもたちの創造性、集中力を育てる場が欲しいなとすごく思っておりまして、そこを強みにしていったらどうか考えました。

それから、住民同士のつながりやコミュニティーについてです。今、まさに、介護保険の改正に伴って住民力の問題がいろいろ叫ばれております。でも、北海道というのは、開拓時代の中で、もともと助け合いや支え合いなしにはまちはできなかったという歴史があると思うのです。孤立社会と言われたり、既存の町内会とかお祭りなどに若い世代の参加が少ないということはどこでも聞きますが、今までのものをもっと生かすというより、そういう人たちを巻き込みながら、そうした方の意見をどのように生かして新しいものを生み出していくのか、そういうところが何か足りないなというふうに思います。

そこでは、やはり、コーディネーターというものが必要だと思います。自分たちが子育て支援をしていて思うのは、年齢の高い方と若い世代には必ずジェネレーションギャップというのがあるので、その間に立つ人たちがどうコーディネートしていけるかということはすごく大事だと思っていて、そんなことを大切にしていったらいいなと思いました。

○司会（小玉環境生活部長）

ありがとうございます。

それでは、話題の二つ目といたしまして、住み続けたいと思える北海道とするため、生

かすべき北海道の強みとは何かにつきまして、札幌コンサドーレの宗像様、お願いいたします。

〇宗像さん

住み続けたいと思える北海道とするためにということですが、サッカーにおいては、残念ながら、北海道という場所はあまり適切ではないのかなと感じています。というのは、サッカーはどうしても外でやるスポーツです。ですから、私たちのようなアマチュアですと、雪が解けた５月から１０月くらいの半年間だけとなります。雪が積もるとクローズしてしまいますので、その後の１１月から４月までは屋内でのフットサルという少人数でやるサッカーに移ってしまうので、あまり適切ではないのかなと思っています。しかし、そんな中でも、私が北海道でサッカーをやりたいなと思うのはきっと何かあるのかなと思っています。

今、松實さんもおっしゃったとおり、より安全で安心な食材が一番の強みなのかなと感じます。また、めり張りのある四季があり、夏も暑過ぎず、半年間は本当にいい気候です。梅雨も、最近は多少はありますが、そんなにひどくはなく、そんな環境で外でサッカーのトレーニングをできるというのは北海道のいいところではないかなと感じます。

ただ、本当にそうした北海道のよさがあるのですが、なでしこジャパンに行きたいとか、トップを目指したいというお子様は、どうしても中学校、高校から道外に出ていかれることが結構多いですね。そういった選手の流出を少なくするために、北海道の良さをもっともっと伝えていきながら、北海道だからこういう選手ができるというところがあったらいいなと思いながら指導しています。

〇司会（小玉環境生活部長）

ありがとうございます。

それでは、話題の三つ目の北海道の潜在力、優位性、特徴などの強みを最大限に生かすために何ができるのかですが、中川様に、どういうふうにしたら強みを生かした具体的な取り組みをできるか、お話をお伺いしたいと思います。

〇中川さん

まず、北海道の優位性というところで、私もやっている家庭医、何でも診る総合医ですが、北海道にはこうした医者を育てる組織が複数あります。ですから、行政と組織と地域が連携して、地域で活躍する家庭医、総合医を育てていきたいと思います。

やはり、子どもを産むには産科が必須ですが、私たち家庭医も、健診とか、トラブルのない出産であれば扱えると言われておりますので、行政、家庭医、専門医の連携によってそういったトレーニングの体制を整えていくことができればいいなと思っております。

また、北海道の優位性ということでは、知事が女性ですので、子育てと仕事を両立することに非常に理解があるのではないかと思っております。子育てをされたことがある方は感じられているのではないかと思いますが、私は、子育ては全ての原点ではないかと感じております。ですから、つけ焼き刃的ではなく、子育てを大きな柱として政策を立てていっていただきたいと考えております。

それから、私が外来で診ている経験から、今は生活習慣病の方がたくさんいらっしゃいますが、大人になってから自分の習慣や考えを変えていくのは非常に大変なことです。三つ子の魂百までと言いますけれども、やはり、小さいうちからきちんとした生活習慣を身につけていくことが大切です。また、ＷＨＯでライフスキルということが提唱されておりますように、生きていく力を身につけた子どもを育てていくことが非常に大事だと思っております。ライフスキルを身につけた子というのは、自分で考え、自分で人生を選択していく、そして、自分のやりたい職業につくことができますし、自然と子どもを産んでも働き続けたいと思うようになります。男女を問わず、楽しく生き生きと働けること、それがそれぞれの職域の活性化につながりますし、長い目で見ていくと、それが北海道の活性化につながっていくと思います。また、医療面においては、ライフスキルが身についていると自己管理ができていきます。そして、病気になりにくいですから、医療費の削減にもつながりますし、健康な老人がふえることでさらに社会の活性化にもつながっていくと思われます。

そういうことを踏まえた上で、私が考えた具体的な取り組みとしては、子どものために地域の人々の力を引き出していけば、つながるということもできるようになっていくと思います。子どもというのは非常に未熟な立場なので、人の助けを必要としますから、そういうところで必然的に複数の大人が集まって支えていくという構造になっていくので、皆様が活動されているように、そうしたことが地域の活性化に役立っていくと思います。

また、メディアを使って子育ての重要性をＰＲしていただきたいと思っております。というのも､今まで子育ては母親が担うものだという社会の通念のようなものがありました。しかし、実はものすごく大事な仕事であって、それを母親だけに任せておくのもどうかなと思います。やはり、母親、父親、祖父母、地域住民も本当に大事なのだという意識とか知識を共有していけたらいいなと思っております。

あとは、親をサポートすることによって親のゆとりをつくることが必要です。子育てと

いうのは、必死にやっているのはわかりますが、やはり、ゆとりを持って子育てしたほうが子どももよく育つと思います。そういった点では、例えば、病児保育とか、夜の会議に出席するようなときの短時間預かりなど、そうした制度を整えていただきたいと思います。さらに、子どもの学びをサポートしていくことも大事かなと思います。

私は、この会議に出席するに当たって、周りの働いているお母さんたちにいろいろお話を伺ったのですが、全員が病児保育は本当に必要だと話しておりまして、札幌だとそういった設備もいろいろ整っているかもしれませんけれども、地方ではまだなかなか行き届いていないのだなと実感いたしました。

○司会（小玉環境生活部長）

ありがとうございました。

それでは、話題の一つ目に戻っていただきまして、先ほど松實様から中標津町の状況をお話しいただきましたので、今度は、札幌市内で子育て支援を行っておられる小林様に利用者の声などについて一言お願いしたいと思います。

○小林さん

札幌市は、転勤族の方も多いのですが、子育てしていく上で住みやすいよという声もあります。ただ、現状は、札幌市の合計特殊出生率は全国的にも低くて、政令指定都市の中でも下から１位、２位を争うぐらいです。そういう中でも、皆さんが札幌に引っ越されてきて喜ぶのは、広くてきれいで大きな公園がたくさんあるし、雪でも雨の日でも遊べる屋内の施設も整っていて、子どもたちを伸び伸び遊ばせることができると話されています。また、札幌市は、子育て支援のＮＰＯ団体や市民活動団体が結構たくさんあって活発に活動していますので、公的な支援ではなかなかできないようなはざまみたいなところを民間のＮＰＯ団体が担っていたりして、そういうところもすごくいいと思います。

実は、私たちのところは、昼間の多世代型子育てサロンなので、働いているお母さん方に出会うことはなかなかなかったのですが、中学生、高校生など若者世代の子どもたちがここを居場所にするようになって、その中で見えてきたのが、課題を抱えた子どもたちというのは、大きくなってからだとなかなかケアが難しい、コストもかかるし時間もかかるということです。では、どこで手を打ったらよかったのだろうかと考えると、やはり乳幼児の子育てのときの親子をしっかり支援することだと思います。もちろん、課題を抱えた親子が短期間に改善することはなかなかありませんから、その後もいろいろな困難を抱えることがあります。そのためにも、乳幼児期が終わってからも、小学生、中学生、高校生、さらにその後になっても集えて相談できるような多世代型の場所が必要だなというふうに思っています。

また、課題を抱えた子どもたちの背景には、ひとり親家庭の困難さも見えてきています。今、ひとり親家庭の貧困率は５０％以上になっていますが、本当にひとりで子どもたちを育てていくのはなかなか困難で、お母さんがＤＶに遭っていたり、ほかの問題を抱えていたりして親御さん自体にもケアが必要な場合もありますので、やはり、親御さんも一緒に支えていくような仕組みが必要なのだなというふうに実感しています。

○上道さん

今回の機会をいただいて、子育て世代のお母さん、私たちのところに来ていただいているお子さんたちの保護者、一生懸命に頑張っている若い女性職員とか、いろいろな方にお話を伺いましたが、重要なのは人だなということをすごく実感しています。やはり、女性の活躍ということだけではなく、また、性別、年齢、出身といった目に見えることだけではなく、男性でも、女性でも、子どもでも、大人でも、その人の得意なことは何だろう、好きなことは何だろうということを見ることが大事だと思います。そのことによって、例えば何か事業をやりたくなったときに、いろいろな人材が集まれるように考えていったほうがいろいろな問題を解決するのに早いのではないかと思いました。

女性がこういう仕事をしていると、女性の話を聞きたいと言ってよく集められますが、こういう意見を持っているのは女性だけではありません。ですから、男性の視点から見たらどうなのだろうとか、まちのお年寄りから見たらどうなのだろうというように、特に地方では若い世代がどんどん減ってきているので、男性も女性も一緒になってやらないと続いていかないというお話をよくさせていただいています。いろいろな人がいて、自己実現をできる場があることはすごくいいことだと思いますし、子育てしていても、地域のサークル活動でも、地域の中に居場所があるとか役割があると、そのまちでの暮らしを心から楽しめる環境をつくることができると思います。

また、私は、子どもの体験活動をしていますが、子ども時代のたくさんの経験というのは、きっと大人になったときに自分を支える根っことか糧になると思うのですよ。その部分に地域のいろいろな人が関わってくれて、北海道の暮らし、自分たちのふるさとの暮らしというものをできるだけたくさん詰め込んであげれば、あとは子どもたちがその中で残ったもの、残していきたいなと思ったものを選び取って大人になっていくと思います。そういうものがあったら、例えば道外に出たとしても、自分たちのふるさとを客観的に見られるようになると思うし、北海道という土地、自分のふるさとについて考えるものが育っているのだと思います。そういうふうにして、やっぱり北海道っていいな、自分の育ってきたまちっていいなと思える子どもたちが育っていけば、自分たちにやってきてくれたことを次の世代に残したい、北海道に返したいと思ってくれる子たちもきっといるだろうし、

それこそサッカーでもプロの選手が出てくれば北海道でもできるんだという自信になると思います。

私も、浜頓別という田舎の出身で、よそ者として厚真に来ていますが、自分が育ったまちで地域の大人たちにいろいろしてもらったことを、今度は厚真の子どもたちに返しているというような感覚です。そういうことは、札幌の都市部でも地方でも同じことができると思いますので、そういうことができる環境を整えていく、そのことを担っていくのが今の大人の責任かなというふうに考えています。

○小路さん

私の提供した最初の資料は新聞の切り抜き写真ですが、歌登という２，０００人ぐらいの小さなまちに引っ越してきて、まず、夏のお祭りのとき、全校生徒によって１日５時間かけておみこしが町内をぐるっと回るのに感動しました。また、年越しのお祭りや季節ごとの雪のお祭り、夏のサマーフェスティバルなど、まちのお祭りスタッフということで、多分、２０代から５０代ぐらいの男性が中心になって、女性も一緒にいろいろなお祭りを盛り上げていたり、文化会館にはお年寄りも来てお酒を飲みながらカラオケをやったり、そういうお祭りがとても充実しているなと思いました。左下のハロウィンのパレードは、お母さんたちが企画している放課後子ども教室のもので、これも、週１回ぐらい、工作やレクなどをして誰でも参加できるものです。こうしたお母さんたちやお父さんたちの活動があって、誰もが一緒になって手伝おうとか、声がかかっていなくてもほかの子どもの面倒を見ようとか、そういう感じがすごくいいなと思いました。

また、２枚目は、枝幸三笠山スポーツクラブのやっている事業の一部を紹介しました。このほかにもエアロビクスやヨガや子ども向け教室などもあります。私はウインタースポーツが中心なので冬の写真が多くなりましたが、右側のスキー場の写真は、冬になると、流氷が来て、本当に海が真っ白になって陸地につながるようになるのです。リフトに乗りながらそれを見て、本当に絶景だなと思っています。

右上の写真は、枝幸町は小学校が９校ありますが、現在、枝幸町から委託されて体育の授業に体育支援員を派遣しています。それによって、プール授業とかスキー授業などはグループ分けができるようになり、充実した体育の授業を受けられていると思います。

それから、自分が子育てをしていて、やはり、大きい学校のほうがもっと難しいことが

できるのではないかとか、刺激も多いのではないかと思うのですが、小さい学校を見ていると、子どもたちへの目が行き届いているし、子どもも勉強に集中しているなと思うのです。また、学校以外の習い事が充実していると、やはりこのまちにいたいなと思えますが、ここにはピアノ教室もあるし、メンバーぎりぎりですが野球少年団もあって、自分の子どもも頑張って活動しています。枝幸三笠山スポーツクラブにも月ごとの会費制で子ども向けの運動教室がありまして、そんなに運動していない子でも楽しみながら軽く運動できますから、運動する子どもたちが増えたと思います。

〇宗像さん

今、北海道コンサドーレ札幌で、２００６年から提携しているＪＡグループ、北海道と一緒になって、選手とともに北海道各地を回って、サッカー教室にプラスして食育の講座も一緒に開催しています。私も、小さいころはそんなに考えていなかったのですが、食べたもので体ができる、食べたものがそのまま人間になるということを知って、本当に食べたもので変わっていくということを子どもたちに伝えなければいけない状況だと感じています。ですから、コンサドーレのほうでも、必ず、サッカー運動、そして食事、休養、この３本柱をしっかりと子どもたちに伝えております。

ただ、子どもに伝えると、子どもたちはわかるのですが、その後、サッカー教室をやると、話したことがわからなくなってしまう子どもが多いので、必ず保護者にも参加していただきます。そして、サッカー教室の次の日から、毎日３食の食事を親子が一緒になって考えてもらうという活動を行っております。そうやって、何年後かに、あのとき、話を聞いて変わりましたという子どもが出たらうれしいなと思っております。

〇中川さん

北海道における産む環境についてですが、産婦人科医ではないので、直接、産むほうには関わらないのですが、産前の妊婦だったり、出産後、風邪を引いたということで赤ちゃんを連れてきたり、いろいろなことで関わっております。

今日は、皆さんのお話を伺って、やはり同じように子育てが大事、食育が大事、運動しながら体を鍛えていくことも大事と、同じ考えを共有できてすごくよかったなと思います。人はすぐには変わりませんが、長い目で見てそういった考えを訴え続けていく、発信し続けていく、やはり、そういうことで意識は少しずつ変わっていくのかなと思います。ぜひ、諦めず、子育てを中心にいい環境にしていけるように、皆さんで協力しながらやっていけるといいなと願っております。

〇山谷副知事

先ほど、女性だからといって集められるのはおかしいですよねというのは、確かに僕も

そう思います。今の「輝く女性」も、政府が勝手に言い出した話でもあるし、人口減少の中で、働く人の人数が減ってきたから働く人を確保しなければいけない、そういう机の上の数字の議論から出てきている話でもあるように思います。

実際にこうやってお会いしてお話ししていると、今、うちの職場でもそうですが、正直に言って、女性のほうがしっかりしているのですよ。やはり、男はある一定のヒエラルキーの中でずっと訓練されてきているので、景気が悪いとなると、みんなが景気が悪いと言って何となく落ち込んでしまいます。でも、女性は、生活というところから、まず何をしなければいけないかということをしっかりと組み立てることができるので、景気が悪くても食べられる分があればいいじゃないかと、自分たちが今やるべきことをしっかりやろうというので、いろいろなことをやっておられます。

今日お集まりいただいたのも、たまたま女性というふうに冠をつけておりますが、やはり地域でしっかりといろいろな取り組みをしている方にお話をお聞きしようと思って、今どこに人がいるかと探したら、大体、女性が出てきてしまうのですね。そういう意味で、女性として活動してどうだとか、女性として活動して何に困っているかというよりも、北海道に活力を与えるのにどういう切り口でやっていけばいいかということを皆さんにお伺いしたいという趣旨でお集まりいただいたので、まさにそういうお話を聞けてよかったなと思っております。

子育て、食育が大事ということも、多分、僕らの子どものころは、親なんて余り構ってくれませんでした。食事にしても、僕が子どものころに初めてインスタントラーメンというのができまして、うちのおやじが最初に買ってきたのが日清のチキンラーメンで、それにお湯をかけて食べていたのがお昼ご飯だったり晩ご飯だったり、そんなふうに放っておかれて育ってきた世代でした。しかし、こうやって世の中が複雑化、高度化してくると、やっぱり人間の子どもというのは一人前になるまで手間暇がかかる生き物なのですよ。そうすると、そういう中でちゃんと生きていくスキルを身につけさせるには、きっと昔より手間暇もかかるし、時間もかかるようになってきているのだろうなと思います。そして、そのことは、社会を健全に保つ、社会の活力を維持する、そして次の世代につなげていくという意味でまさにキーであり、テーマになっているのだろうと思います。

そういう中で、皆さんから、女性であると同時に、生活者であって、地域を生活という視点からきちんと見て、そうした中で子育てをしっかりとやっていこうとされているお話があったと思います。そして、自分の地域のことを自分の言葉で語れる、そうした子どもを育てたい、そういう子になってほしいというのは、まさにそうだと思うのですが、そうしたことに皆さんのお話がつながっているなと思って、僕らもこうした視点で仕事を見て

いかなければいけないと感じております。

今日は、道庁内の各部、また教育庁、警察本部の方々がオブザーバーとして参加しています。それぞれの部署で、皆さんのような取り組みを地域の中でさらに広めていきたいと思って関連するところを集めるとこんなになってしまうのですね。今日、皆さんのお話を聞いて、それぞれ施策に反映していこう、役立てていこうというふうに思っているので、決して威圧感を与えるために出ているわけではありません。皆さんと一緒にこれからを考えていきたい、そういう趣旨で集まっていますので、大変有意義なお話を聞かせていただいているなというふうに思っております。

〇司会（小玉環境生活部長）

それでは、二つ目の話題に参りまして、住み続けたいと思える北海道とするために、生かすべき北海道の強みとは何かということです。

一つ目のテーマでもいろいろお話が出ましたが、改めまして、松實様から、再チャレンジのフィールドとしての考え方も伺っておりますので、一言お願いしたいと思います。

〇松實さん

根室管内は、まさに、第１次産業の酪農業と漁業の後継者不足で非常に悩んでおりますが、酪農のほうでは、別海町、中標津町に研修所があって、都会からご夫妻で来て、子どもを育てながら研修し、新規に就農される方たちもふえております。そういうとき、なれない土地で子育てが始まるわけですね。新規就農者ですから、周りにご親戚もおりません。その地域に集落があったりすると、その方たちが手伝ってくださったり、ＪＡの婦人部が声をかけてくださることはあるみたいですが、やはり溶け込むのにはなかなか時間がかかっているようです。ですから、私たちも地域でファミリーサポート事業をやっていますが、ファミリーサポートの需要などはそういう新規就農の方たちによって非常にふえています。

北海道の人は本当に温かいし、すごく協力的です。東北の震災のときに、南部藩だ、伊達藩だというのがあって、あなたはどこの人だなんていうのは、何だろうな、北海道の私には考えられませんという感じでした。うちの実家の父は奈良だったり、こちらは新潟から来たとか、みんなでそうやって寄せ集まって暮らしているから、そういうことに対する意識がないです。そういう中では、誰かが助けてと言うと、じゃ、頑張ろう、できる人がやろうよという土壌があると思います。そういうときに、どこで助けてと言えるのか、言う場所があるか、そこが非常に問題なのだと思います。若夫婦もそうですが、みんなが頑張り屋なので、自分は頑張らなきゃいけない、ここまで来たのだからやらなくちゃいけないんだみたいなところがやっぱりあるのですね。それはそれで重要だったとしても、やは

り、必要な人たちに手助けをかりる場というか、そういう相談窓口は子育てなどでも必要なのかなと非常に思います。

それから、食育の話も出ましたが、道東では木育が今は結構進んでおります。このリーフレットの中にも木のおもちゃがいっぱい出ていると思いますが、これは、うちの理事ですが、校長を退職した方が、うちに来るお子さんたちのために木のおもちゃをつくってくださっています。木というのはとても香りがありますし、色を塗っていませんからお口に入っても安全だし、とっても癒やされるのですね。そして、色を塗っていない分、だんだんあめ色になっていったり、年々、変化していくことも楽しめて非常に人気のあるおもちゃです。

実は、こういうものをつくると、お母さんたちは、見ているうちにこれが欲しいとかあれが欲しいとかおっしゃるのですが、手づくりですからそう簡単に販売はできません。しかし、私たちも運営費を自分たちで捻出しておりますので、それでも欲しいという方たちに販売して、それを活動費にしようということになったのですね。ただ、デザインというのはやはり今の方たちが好むものがあるのですが、つくる方たちは年齢が高いから昔ながらのものになってしまうのですよ。そこで、ムクという団体をつくりまして、つくるのは年齢の高い方々、デザインをするのは若い方々ということで、そこがうまく合体すると結構おもしろいおもちゃがいろいろできました。

それが波及しまして、計根別という地域で羊を飼っている地域があるのですが、そこのおばあちゃんたちが自分たちで羊の毛を刈って毛糸にしているので、今度は、その毛糸を使って、お母さんたちがデザインして、編むのはおばあちゃんたちということで、「る・る・るブランド」と呼んで自分たちで楽しんでいます。数はそんなにできませんが、例えば、赤ちゃんが車に乗るときに、ケープがあるとすごく便利なのですね。下手にコートを着せると、着せたり脱がせたりが大変なのです。でも、フードがついているケープだと非常に便利だというアイデアが出て、それを毛糸で編んでもらおうということになりました。今、それがお母さんたちに人気で、おばあちゃんたちも非常に喜んで編んでくれたりしています。

やはり、そういう人のつながりをどううまく生かしていくか、そして、子育てというのは若いお母さんたちのセンスとかその時代の感覚というのがすごくあると思うので、そうしたものをどうマッチさせるかがすごく大事だなというふうに思っています。

〇上道さん

私は、今、独身なので、自分の子育てはしていないのですが、再三、人の子を育てる前に自分の子をと言われ続けております。

それでも、外から厚真町に入ってきて、このまちはおもしろいなと思えるところは、そもそも行政の教育委員会の主宰事業を委託で民間に出すようにしてやり始めたことでした。放課後子ども教室という事業は週４日間ありますが、職員が行政のトップの方々にちゃんと説明して実現していく、そういうことをやろうと言ってやり切れるだけの人がいたということなのです。私は「イケてる公務員」と呼んでいますが、そういう人がいるということは民間にとっても市民活動をしている人たちにとってもすごく心強いですし、そういう人たちが町の運営だったり事業を考えてくれているのはすごくおもしろいなと思いました。それと同時に、何か私が手伝えることがあったら一緒にやりたいなと思える人たちがたくさんいるまちだなと思ったのです。放課後教室というのは、私の知り合いが本当にゼロの状態から入っているのですが、そういう人たちと一緒にやる中でいろいろな人につないでもらいました。商工会の青年部の活動に入ったり、農協、漁協にもみんなで頑張ろうという若い人たちの組織があるのですが、そういうところで代表をやらせてもらえるようになったりして、みんなが応援してくれる環境というのはすごく大事だなと感じました。

私は仕事をするという面で入りましたが、子育てという部分でも、支えてくれる人が民間にも行政にもいるとか、行政にしても、福祉課の人、教育委員会の人、まちづくりの人などが一緒になって、子育ての公営住宅を整備しましょうと言ったり、こども園など新しい施設をつくるときに課の垣根を越えてプロジェクトチームを組めるとか、柔軟に対応している姿がきっとこのまちの魅力の一つなのだろうなというふうに思っています。

今、このまちを活性化しようということで外から入ってきてくれた地域おこし協力隊という制度があるのですね。ただ、せっかく入ってきたのに、縦のラインがあって、本当は産業と教育をつなげたいけれども、あなたの仕事は教育でしょうと言われて産業の人たちになかなかアプローチできないということをよく耳にするのです。それですごく困って、求められていることをやりたいと思ってもなかなかうまくできない、結局、心が折れて、その地域を去ってしまうというのは、すごくもったいないことだと思います。

やはり、新しく外から入ってきた人たちも柔軟にいろいろな形で活動できる場があって、行政の方々や地域にある青年部活動、市民活動の中で一緒にやっていける環境づくりがすごく必要だなというふうに思っています。そして、その環境を整えるのは、制度だけでは

なくて、地域の側の気持ちの問題だったりもするので、どういうふうに人を受け入れる環境をつくれるかということをもっと考えていって、いろいろなアイデアを取り上げていかなければならないと思います。そんなふうにしていろいろなことができるまちというのはすごくおもしろいなと思ってもらえると、北海道の地域でも都市部でもいろいろな人が入ってきやすくなるのではないかなというふうに感じています。

〇小路さん

地域おこし協力隊ですが、新たに入ってきてまちのために活動している方が、いろいろなアイデアを持って何かしようとしていることに対しては、やっぱり周りが応援して盛り上げてほしいなと思いました。

〇中川さん

私の住んでいる寿都町も人口３，０００人ぐらいのまちなので、結構、顔見知りだったり、みんなが何かの形でつながっていますが、今の上道さんのお話を聞いて、やはり、何かをしようというときには、つながりやすさというのはすごく大事だなと思いました。自分の仕事という枠を超えて、やりたい理想に向かってみんながいろいろな形で協力していける形をつくっていくことはいいことだなと思います。

また、北海道は人口規模の小さい集まりが多いので、その分、そういったことを実現していきやすいのかなとも思いました。

〇小林さん

ずっとここに住み続けたいなと皆さんが思うのは、多分、人と人のつながりの中でそう思うと思うのですよ。関係性ができて、この関係性の中でここに住み続けたいなというふうに思うので、松實さんもおっしゃっていましたように、つながりのできる拠点が大事だと思います。北海道はよそ者がたくさんいらっしゃるので、余りそんなことを気にしないで温かく迎えるという道民性があるので、そこを強みとしてつながる拠点というところを特徴として出せたらいいなと思います。

また、つながる拠点になるためには、そこにコーディネーターみたいな役割を担う人が必要だなというふうに思います。それは、公的な行政マンではなくても、地域にはすごくおもしろい活動をされている元気なＮＰＯや民間の方もたくさんいるので、行政がそういう方をサポートして活用されたら、つながる拠点がもっとおもしろいものに広がっていくのではないかなというふうに思います。

〇山谷副知事

「イケてる公務員」ですが、こういうふうに言ってもらえるというのは、そのまち自体

が幸せだと思います。行政も、確かに、お役所仕事で、来たらやるという人もかつてはいたと思いますが、今はそういうことはあまりないと思うのです。言われたら、何とか解決しなければいけないと思って、いろいろな部署の人間が集まって相談しようというふうにしているけれども、ただ、語る言葉がかた苦しいので、それが伝わらなかったりすると、一生懸命にやっていることが外に向かって伝わっていかないのです。ある意味ではそれが行政の不幸なところでもあるので、こういうふうに評価していただけて、そうした柔軟性があることがこのまちの魅力というのは、こんな褒め言葉はないと思います。これは町長に伝えておきます。それくらいうれしい言葉ではないかなと思います。

それから、人と人とのつながりやすさということがありました。やはり、それが住みやすさにつながります。そして、小規模な市町村が多いからつながりやすいとおっしゃいました。これは、今、人口減少で困ったとみんなが落ち込んでいるときに、逆に、つながりやすさがあるじゃないかと言ってもらえると、それで悩んでいる市町村は、そうか、それをつくればいいのだというところに目が向いていくなと思って、きょうは大変いいヒントを頂戴したなと思います。

それから、助けてと言える土地柄というのは、確かに、北海道は、開拓のときから味噌やお米を隣に借りに行ったりしていました。でも、本州では味噌はそれぞれの家でつくるという習慣があるから、そういうことがないのですね。そういう意味では、まさに北海道はその土壌があると思います。

それから、先ほど多世代型の施設運営ということがありました。僕も釧路にあるそういう施設を見に行ったのですが、実は、認知症のおじいさんが、物理を教える高校の先生だったので、子どもに物理を教えたら元気になってきたということもありました。それから、おばあちゃんが食事をつくったり、女の子に編み物を教えたりしていて、やっぱりこういう場が必要だなと思いました。ただ、福祉行政というのはどうしても縦割りなので、制度が全部違うから、その運営費をどこで稼ぐかといったときに苦労しておられます。これは、今、道州制特区でそれを認めてくれと道から国のほうに提案している分野ですが、そういうふうに多くの世代がその地域の中で集う場、集まる場所があるということはすごく大事だと思います。

そういえば、病児保育というのは検討していますね。今はどうなっていますか。

〇保健福祉部

ファミリーサポートの委託で、地域づくり交付金で今年からやっております。

〇山谷副知事

それから、病児保育もやらなければいけないので、大分議論をしました。ただ、それを担ってくれるところがそんなにあるわけではありません。どこかの病院に行って頼みますと言えば、それは単に病院の診療時間がふえるだけになってしまいますから、今ファミリーサポートセンターの事業として始めたりしています。ですから、僕ら自身が、いろいろな集まる場、そして、生活という意味で地域の基盤を支える人のつながりを求めているので、まさに、そのことがこうして実際に動いていくと、それが住みやすさにつながり、そこにまた人が移ってきて北海道の魅力につながっていくのだなと。そんなふうに、今日聞いたお話は改めて学ぶことが多々あったなと思って、感謝申し上げます。

〇司会（小玉環境生活部長）

イケてる公務員というお話がありましたが、イケてる公務員の見つけ方、育て方について一言だけ発言したいと思います。

大体、公務員というのは余り褒められたことがないので、褒めてやると伸びると思います。その褒め方ですが、大体、いい仕事している人というのは、ホームページなどできちんと情報を発信しておりますので、そういったものを見て褒めてあげると、またどんどん成長していくと思います。

それでは、北海道の潜在力、優位性や特徴などの強みを最大限に生かすために何ができるのかということにつきましてご発言いただきたいと思います。

〇松實さん

やはり、市民力というのがあって、どう連携するか、協働するかが大きなテーマだと思います。本当に、市町村の方々を含め、道の方々がご苦労されているので、その上で共同体としてどうやっていくのか、誰が音頭をとるのか、まして福祉行政などは非常に難しい問題があると思います。私たちの地域でも、社協を初め、いろいろな方々が動いてくださっていますが、そういう意味では市民の意識を高めることが必要だと思います。

北海道は、行政の方がずっとやってくださって、また、親方日の丸といいますか、国がしっかり保護してくれていた地域だったと思うのです。神戸の方たちなどとお話ししても、自分たちがＮＰＯを立ち上げて、自分たちが自分たちのまちをどうしていくか、行政の方

たちと同じ土俵の中で話し合って動いていかなければならないのだ、自分たちもやるのだという意識が強いのですね。北海道は、まだまだそういうものが低いのかなと思います。全国的に見ても、札幌はＮＰＯ法人の数が多いですが、根室管内などまだまだ難しいです。それは、行政の方々がやってくださいというものでもなく、やはり、私たちがみんなでやりましょうよと声をかけながら、イケてる公務員をつかまえて、いかがですかと私たちから声をかけられるぐらい、私たちも力をつけて勉強していく必要性があるのかなと思っています。

やってくれないからとか、お互いに背を向けているようでは、全然前に進めません。別に責めるつもりはございませんので、私が役場に行ったとき、どきっとされないように努めていきたいなと思っております。

〇司会（小玉環境生活部長）

音頭をとる人を見つけるのは非常に大変でございまして、よく道庁が仕切ってくれればやるのにみたいなことを言います。しかし、大体、人に仕切られたことは余りやりたくないので、やはり、自発的、能動的に活動していく皆様方と出会える場づくりが必要だと思います。

〇小林さん

やはり、つながる拠点が必要だなと思っていますが、ただつくればいいのではなく、そこにコーディネートする人材も必要で、その土地、地域の人を知っている人がやはりキーポイントになると思うのです。それは行政の方でもいいですし、民間の方を活用してもいいと思うのですが、いろいろな種類のつながる拠点みたいなところがあったらいいなと思います。

それから、拠点というのも、今までは子ども、障がい、お年寄りと別々に分けて拠点がつくられていたと思うのです。しかし、今は、多世代というのはすごく効果があります。私たちのところでも、元シェフをやっていた６０代の方ですが、奥さんが亡くなられてから荒れてしまって、家族が誰もいなくて、酒浸りになって、いつ死んでもいい暮らしをしていたけれども、ある日、奥さんが枕元にじっと立っている夢を見たそうです。そこで、何かしなければと思って、社協のボランティアの情報を見て、うちに来たのです。うちでは、課題をちょっと抱えた子どもたちの学習支援や食事提供しているのですが、その方がおやつやご飯をつくってくださることになりました。そうしたら、元シェフだから本当においしいのです。それで、みんなも喜んでその人になつくし、本当にお酒を飲むのも控え

るようになって、ここが生きがいだ、ここを見つけられてよかったというふうに言ってくれるのです。そんな中で、何と、その方は、前に働いていたところからまた声がかかって、６５歳を過ぎてラーメン屋で働き始めたのですよ。それでも、仕事もするけれども、俺の生きがいだから、子どもたちが待っているから、ここのボランティアはやめないと言って、働きながらボランティアを続けてくださっています。

また、不登校とか、いろいろな課題を抱えて傷ついて、もう学校に行きたくないとか、もう死にたいと言っているような中学生が、子育てサロンに来ると小さな子どもたちと遊んでくれるのですよ。お母さんたちは疲れていて外などでは遊べないけど、もう体いっぱい遊んでくれるから、お母さんたちはすごくうれしいのです。きょうは来てくれてよかった、助かったよと言ってくれると、その中学生が、もう目を生き生きとさせて、こんな自分でも必要とされる、役に立つところがあるんだと感じて、また次も来てくれます。そして、子どもたちも、またきょうも来てくれたの、うれしいとなって、中学生も育っていくし、子育て中のお母さんもその子に助けられるという循環が生まれています。

こんなふうに、多世代が集まるところというのは地域のリソースセンターだと思うのですよね。子どもに限らず、大人に限らず、その地域に潜在的に眠っている人たちが拠点に集まって、みんなが循環型で元気になっていくような、そんなつながる拠点がやはり必要だなというふうに思っています。

○司会（小玉環境生活部長）

拠点づくり、場所づくりの重要性だと思いますが、北海道は、割と土地代が安いせいか、非常に空間が多くて、公共施設の面積なども大きい上に、さらに人口が減っていますので、多分、遊休的な施設がかなりたくさんあるのではないかと思いますので、空き家も含めて、そういったものは十分活用できると思います。それから、夜と昼を分けて使うとか、平日と休日と分けて使うとか、二毛作型の活用の方法もあります。ですから、行政の人と話してみると、何だ、そんなことで悩んでいたのかと思うぐらい、案外、解決につながる場合もあろうかと思います。

○小路さん

北海道を生かすということでは、涼しい気候と広大な土地を生かしてスポーツや吹奏楽などの合宿の受け入れがいいのではないかと思いました。また、枝幸町では、先日、スポーツボランティア、おもてなし、異文化理解を学ぶ講座が開かれました。

ただ、枝幸町は、現時点では合宿を受け入れたことがないので、やはり、受け入れるに

当たってはまちの人の共通理解が必要だと思います。泊まるところも必要だし、食事も必要だし、まちの雰囲気も必要なので、これからはほかの地域から来る人を受け入れる理解を深めなければいけないと感じたところです。

〇上道さん

独立すると、こういう活動を続けていくにはお金も必要だなと思うところがありました。例えばですが、全国各地で地域の特産品をお送りしたりしているふるさと納税というのがありますね。その税金の使い道として、いろいろな使い道が考えられる中で、今後は、その一つに、子育て支援で居場所をつくる運営費に充てさせてくださいとか、人材を育成するためにこういう使い道をしますとか、あるいは、スポーツ合宿の費用に使ったり、子どもたちが遠征するときに使わせてもらうなど、次の世代に回すような広がり方を考えてもおもしろいのではないかと思って、そんなことをふるさと納税の担当者と話したことがあります。

そうやって実際に子どもにお金をかけて、そういう使い道をする地域で子どもを育てたいねと思って移住してきたときに、その人たちをすごくバックアップするような体制をとれるようになると、全然知らない土地でも、その人たちが来たときには、厚い真心のまち、厚真のおもてなしの心で迎え入れられて、いろいろな人が集まってくる仕組みづくりもできるのではないかと思います。その仕組みをつくるためには、行政も、民間も、地元の人も、外の人も一緒になっていろいろなアイデアを出し、活動できる環境をつくっていくことが重要だなと思いました。

〇宗像さん

北海道は、住み続けたいとか育てたいということに本当に最適だなと感じます。コンサドーレの選手というのは、本当に入れかえが激しいのです。ことしは２０周年目を迎えまして、たくさんの選手が移籍とか引退されたのですが、北海道出身ではない方が引退してからもコーチなどで北海道で活動しているのは、みんな北海道が好きなんだなというふうに私自身もすごく感じています。私も三重県で２年活動していましたが、北海道っていいよねと言われることが本当に多いのですね。

そんなふうに日本の中では浸透してきていますので、さらに、世界に目を向けて、今度は、もっと若い世代、中学生とか小学生、本当に小さいお子様にもサッカーを通して北海道のよさを伝えることができたらいいなと思います。北海道では、年に１回、長靴で雪を

踏み固めて雪中サッカーをやっています。雪の上ですから転んでも痛くないですし、寒さを忘れるぐらい結構いい汗もかいて楽しいことができます。そういったことや、北海道の食材なども伝えながら、全世界に北海道のよさを伝えていきていけたらいいなと思っております。

○司会（小玉環境生活部長）

雪中サッカーは、オーバーヘッドキックをしても全然痛くないですから、お勧めだと思います。

それでは、最後に、副知事から一言お願いいたします。

○山谷副知事

一つ質問があるのですが、先ほど家庭医でもトレーニングを受けると産科を扱えるようになるというお話でしたね。

○中川さん

日本では余り文化がありませんが、イギリスなどほかの国では、家庭医が産科を取り扱っているところがあります。寿都診療所では、ほかの大きな病院から産科の先生が来て診てくださっているのですが、私もそこで一緒に健診を教えていただいたりしてトレーニングをしております。産科医が本当に少なくて大変ですが、手術などが必要ではない部分では、私たちもトレーニングをすることで十分に取り扱うことができると思います。ですから、ぜひ、そういった部分で家庭医をふやして、産科のある部分をカバーしていくように考えていただけるといいなと思います。

○山谷副知事

ご存じと思いますけれども、ある県で訴訟事件が起きて大変な重荷を背負ったお医者さんがおられたので、産科を選択する学生が激減して、それが今の産科医不足につながっているのですね。お医者さんを育てるには、まずは学校で学び、研修医をやってと、１０年はかかります。つまり、１０年間、産科を選択する人がいなかったら、それを回復するには１０年以上かかることになるので、今はどこのまちでも産科がいない、何とかしろと責められ続けているものですから、今、家庭に入られた元産科の女医さんに戻ってもらえませんかと声をかけたりしております。

実は、道庁では婚活もやっています。今の若者はなかなか相手が見つからないということもあるので、そういう出会いの場をつくるところから始まって、そして産むところ、あるいは、育てるところでは先ほどの病児保育なども含めて、高校生までの間の経済的負担をいかに緩和するか、さらに、今度は立派な親として次の世代を育ててもらえるように、ライフステージに応じた支援をできるだけ地域でやっていただこうと、道としてそのお手

伝いを今やっているところであります。

そういう意味では、まさに、産み育て、住み続ける北海道ということが政策の柱になっております。ですから、今日は女性ということでお集まりいただきましたが、道庁各部の皆さんが今のお話をお聞きして自分たちのヒントになるということがあると、この先、いろいろな仕事を考えたときに、また皆さんのお力をおかりしようと、こういうときに来てもらえませんかとお声をおかけすることも多々あろうかなと思いますので、そのときにはよろしくお願いしたいなと思います。

それから、実は、２年後に、北海道は、北海道と命名されてから１５０年を迎えます。そこで、その１５０年に向けて、それから、１５０年を起点として、次の１５０年に向けた北海道づくりの事業を起こしていきたいと考えております。ただ、道庁が一方的に事業を組み立てても、何か浮いてしまって、さっぱり力にならないということがあっては困るので、皆さんからの提案でそうした事業を組み立てていきたいと思います。事業によっては、道の施策としてやらせてもらうこともあるし、それから、皆さんがおやりになるのを一緒にやりましょうとするのもあるし、それから、これは自分たちでやるからとにかくＰＲだけしてくださいと言われればＰＲも引き受けます。今、そういうことを進めようとしておりますので、皆さん方が活動されている中で、この機会にその１５０年をうまく使ってやろうじゃないか、道庁にイケてる公務員はいるかと試すのもまたいいかなと思いますので、ぜひ使っていただければと思います。

今日は、ずっとお話をお聞きしていて僕はとても参考になりましたし、これからも皆さんに頑張っていただきたいし、また、一緒に地域づくりをやらせてもらいたいというふうに思っています。

本当にありがとうございました。

以　　上